THE NORTHERN REVIEW NO. 31 所載 平成15年7月10日発行

生成文法と語用論

―共感度研究の再評価―

山　田　義　裕

生成文法と語用論

―共感度研究の再評価―

山　田　義　裕

1　はじめに

1950年半ばの「認知革命（cognitive revolution）」は，精神／脳の内部メカニズムを研究対象とする認知科学を生み出した。認知科学の多くの研究分野では，精神／脳というシステムについて「モジュール仮説」を仮定している。この仮説は，精神／脳は汎用（general-purpose）の問題解決システムなのではなく，固有の構造と機能を持つ複数の「認知モジュール」とよばれるサブ・システムが相互に関係し合い機能しているシステムであると考える。[1] 生成文法はこの仮説を前提として，さらに精神／脳には「言語機能(the faculty of language)」という他のモジュールから自律した言語固有のシステムが存在すると仮定する。チョムスキー(Noam Chomsky)は，言語機能はその中核にあり情報を何らかの形で貯蔵している「認知システム(cognitive system)」とこの情報を様々な形で運用する「運用システム(performance systems)」の少なくとも二つの部門から構成されると仮定している（Chomsky 1995a:2, 2000a:117)。運用システムのどの部分が言語特有のものであるのか，つまり言語機能の一部となっているのかは，今後の経験的研究を通じて明らかにしなければいけない問題である。本稿では便宜上，運用システムは言語機能の外にあるものと仮定し，議論の本筋に影響を及ぼさない限りは，言語機能と認知システムを同じ意味で用いて議論を進めることとする。[2,3]

チョムスキーは，精神／脳における言語機能の存在を仮定した場合，次の三つの問題が言語研究の中心課題となると述べている(Chomsky 1986:3)。[4]

---

† 大野公裕氏には草稿段階で貴重な意見を頂いた。ここに感謝の意を表したい。

1 脳科学からのモジュール仮説を支持する証拠については澤口(1996)等を参照。

2 Chomsky(2000b:90)参照。

3 チョムスキーは，最近のハウザーらとの共著論文の中で，認知システムを「狭義の言語機能(Faculty of language－narrow sense)」と呼び，認知システムおよびそれと隣接する運用システム全体を指して「広義の言語機能(Faculty of language－broad sense)」と呼んでいる(Hauser, Chomsky and Fitch 2002:1570-571)。

4 Chomsky（1988:3)では，さらに(i)の問題が新たに加えられている。

(i) What are the physical mechanisms that serve as the material basis for this system of knowledge and for the use of this knowledge?

(1) a. What constitutes knowledge of language?
b. How is knowledge of language acquired?
c. How is knowledge of language put to use?

言語知識（knowledge of language）とは，言語機能の初期状態に言語経験が影響して生じる安定状態の一つである（具体的には個別言語の知識のこと）。(1a)の問題は，この意味における言語知識がどのような特性をもつかという問題である。言語知識の性質は，生成文法がこの半世紀あまりの間，その解明へ向けてもっとも精力的に研究を進めてきた問題であり，この研究領域ではこれまで理論の根本的改善や豊富な経験的研究を通じて多くの発見が行なわれてきた。

(1b) の言語知識の獲得に関する中心的問題は，言語獲得についての「プラトンの問題（Plato's problem)」と呼ばれている。これは，子供に与えられる言語データは量的に限られ質的に劣悪であるにもにかかわらず，それに基づいて得られる知識はなぜこれほどまでに複雑で豊かなのか，という知識獲得についての古くからの認識論上の問題の言語版である。この問題に対する強い関心は，1970年代の終わりに言語機能の基本的認識に関して，生成文法の歴史の中で極めて大きな概念上の転換をもたらした。チョムスキーはプラトンの問題の解決へ向けて，言語は「規則の体系（the system of rules)」であるという当初の見方を破棄し，「原理とパラメーターの体系（the system of principles and parameters)」という言語理論の新たな枠組みを提唱するに至った。[5]

(1c)の言語知識の使用の問題も，生成文法の誕生以来，言語知識の性質および獲得と並んで言語研究が解明すべき重要な問題の一つである。チョムスキーは言語使用における中心的問題は「私たちには，その状況に適した言語表現を使うことがどうして可能なのか」という「言語使用の創造的側面（the creative aspect of language use)」を明らかにすることであると述べている。[6]

しかし，この問題については「言語使用の問題は知覚（perception）の問題と産出（production）の問題に分かれる」という基本的研究分野が確認されているだけ

---

[5] Chomsky（1986:6, 102）は規則の体系から原理とパラメーターの体系への転換を "the second of the two major conceptual shifts" であると述べている。そして，この基本概念にのっとって最初に考案された具体的モデルが1979年のピサ講義で提唱された「GB 理論」である。チョムスキーは，最初の見方の変化（認知革命）を17世紀の合理論的考えの「リバイバル」（Chomsky 1988:4, 1995a:5）と述べる一方，原理とパラメータの体系の出現は何千年という長い言語研究の歴史の中で極めて根本的なパースペクティヴの変化であるとその重要性を強調している（Chomsky 1995a:5, 1995b:31, 2002:95)。

[6] この問題は，デカルトの問題（Descartes's problem）とも呼ばれる。チョムスキーは，デカルトの問題は科学的な探求により明らかにすることができない、人間にとっての謎（mystery）である可能性もあるという。

で，知覚分野での構文解析(parsing)の研究を除くと，これまで目立った経験的研究はほとんどないと思われる。

言語使用の問題が，以前から強く意識されていたにもかかわらず，これまで大きな研究の進展がみられなかったのにはいくつか理由があると思われる。まず第一の，そしておそらく一番大きな理由は，言語使用の問題はいくつもの要因が複雑に絡む極めて難解な問題であり，適切な経験的問題が提起できなかったからであろう。二つ目の理由は，これまでの生成文法研究では言語機能の特性の解明にその多くの労力が注がれ，ごく最近まで言語機能（認知システム）の特性を考える際にそれと隣接する運用システムとの関連で考察することは実質的に行ってこなかった点にあると思われる。言語使用の研究というのは，後で議論するように，まさに認知システムと運用システムとの相互作用についての研究である。認知システムを運用システムから切り離して，その特性を理論内的に考察する研究が盛んな時期には，言語使用研究に目が行かなかったのは自然なことかもしれない。三つ目には，言語の使用に関連すると思われる認知研究の分野において生成文法の言語研究に大きなインパクトを与えるような発見が，少なくとも生成文法と相容れる形では存在しなかったことも原因かもしれない。

しかしこの10年あまりで，少なくとも第二の点については事情は変化してきている。チョムスキーはこの10年程（ミニマリスト・プログラムを提案する頃から），認知システムを運用システムにより相対的に特徴づけることを強く意識し始めているように思える。福井直樹はこれについて次のように述べている。

> ちなみに，生成文法理論の主な対象である言語機能の認知システムの特性が，このように運用システムによって「動機づけられる」(motivated)という発想は，極小モデル以前の枠組みにおいては希薄であった。むしろ，認知システムの自律性を否定するものとして等閑視する傾向さえ認められた。極小モデルにおいても，むろん認知システムの自律性は保持されているが，認知システムが一般的認知機構の中で占める位置に注目することによって，それが示す諸特性のすくなくとも一部が運用システムからの要請の結果であることを明確に認めた点において，従来の枠組みから大きく一歩踏み出したと言えよう。極小モデルの出現によって認知システムと運用システムの間の相互の研究に新たな地平が拓けたと言っても過言でないと思う。(福井　2001:88-89)

ミニマリスト・プログラムでは，認知システムが運用システムから見てどの程度まで「完全(perfect)」なシステムかというテーゼを現在の理論研究の中心に据えてい

---

[7] これは，「強いミニマリストのテーゼ(The Strong Minimalist Thesis)」という名前で呼ばれる(i)の仮説である。
(i) Language is an optimal solution to legibility conditions. (Chomsky 2000b:96)

る。[7] 認知システムの特性をそれと隣接する運用システムとの関連で考えるということは，まさに(1a)の言語知識の性質の問題を(1c)の言語知識の使用の問題と結びつけて考察するということである。

理論の進展にともない，認知システムと運用システムとの関係に注目が集まり始めてはいるものの，言語使用の問題はさまざまな要因が絡む複雑な問題であることには変わりない。しかし，言語の使用と関連する認知研究の諸分野においてこれまで生成文法とは独立に続けられてきた研究を，「認知システムと運用システムとの関係」という観点から見直し，その研究を言語使用の経験的研究にうまく結びつけることができれば，言語機能の理論研究にインパクトを与えうる新たな言語使用の研究を生み出すきっかけを作ることができるかもしれない。

本稿は，生成文法における言語使用の経験的研究の新たな方向を，認知システムと運用システムとの相互関係という観点から探る試みである。具体的には，久野暲等の一連の視点現象研究を，発達心理学等の心理学諸分野で仮定されている「心の理論」という認知メカニズムから見直す可能性について考えてみたい。その前に議論の準備として，二節でチョムスキーの言語使用・語用論研究についての最近の発言を紹介し，三節で心の理論についてごく簡単に概観する。

2　チョムスキーの語用論に対する見解

チョムスキーは，生成文法の初期から現在に至るまで，言語使用の研究あるいは語用論が言語研究の中心的研究部門であることを繰り返し強調している。[8] この節では，現在の生成文法の理論的枠組みにおいて言語使用の問題をどうとらえるべきかを，チョムスキーの最近の語用論についての発言をもとに考えたい。

Stemmer (1999) は，E メールによるインタヴューでチョムスキーの言語使用あるいは語用論についての最近の見解を聞き出している。以下，この中の本稿とかかわりのある個所を「狭義の統語(narrow syntax)」(以下，NS)と語用能力(pragmatic competence)との関係についての発言を中心に簡単にまとめる。

このインタヴューの中で，チョムスキーは現在の理論的枠組みにおける認知システムと運用システムの関係，より具体的には認知システム内の計算部門である NS と言語使用に関わる特性（例えば「新情報・旧情報」）との関係，について論じている。「新情報・旧情報」は NS における “displacement effects” と関係があり，さらに “displacement effects” が NS における統語操作により具現するものと仮定した時

---

[8] Chomsky の語用論・言語使用についての発言は，Kasher (1991)が非常に丁寧に整理して議論している。また以下で紹介するインタヴューにおいても，ステマーから「一般言語理論は語用論をその総合的統合理論の一部門あるいは一レベルとして含む必要がある」というレヴィンソン(Levinson)の主張に対してコメントを求められ，チョムスキーは語用論は言語理論の中の単に一部門・一レベルというのではなく，“a central and crucial component” であると述べて，言語理論における語用論の重要性を強調している。Stemmer (1999:398)を参照。

に，個々の統語操作と語用論的情報とはどのような関係をもつのか。チョムスキーは，統語操作が語用論的情報に直接アクセスする可能性に対しては完全に否定的である。統語操作が認知システムの外にある語用論的情報に直接アクセスすることを許すと，統語理論の研究はその射程が途方もなく広がり，認知システムは「合理的研究(rational inquiry)」の対象とはならなくなるというのがその理由である。

では認知システム内のNSと運用システムはどのような関係とみなすのが理にかなっているのか。チョムスキーの考えは次のとおりである。つまり，統語操作は運用システムから「自律(autonomous)」して適用し，統語派生の結果生み出された表示は運用システムとのインターフェイスへ向けて出力される。その後，運用システムの各部門が統語から出力された表示の諸特性を独自の原理に照らして解釈するというメカニズムである。そして，語用論とは「displacementのような言語表現の特性が，言語外の（しかし人間精神の一部である）システムにより，新情報・旧情報の観点からどのように解釈されるかを扱う理論」と考えるべきであると述べている(Stemmer 1999:400)。

本稿では，このチョムスキーの議論を踏まえて，認知科学における語用論あるいは言語使用の研究の目標を次のように考えたい。

(2) 語用論あるいは言語使用の研究は，言語機能の中核にある認知システムが生み出す言語表現を，認知システムとは独立した特性をもつ運用システムがどのように解釈するのかを明らかにすることを目的とする。[9]

言語使用の研究を(2)のようにとらえた場合，研究の主要な対象の一つは認知システムと運用システムのインターフェイスであろう。運用システムを構成する各認知機構が，インターフェイスにおいて認知システムから出力される表示をどのような原理に基づきどのようなメカニズムで解釈するかを経験的に解明するのが言語使用の研究ということになる。

言語使用の研究が扱うべきもう一つの問題は，運用システムの内部構造についてである。現在，運用システムについては調音・知覚システム(articulatory-perceptual system)と概念・意図システム(conceptual-intentional system)から構成されるというごく一般的構図が示されているだけで，それぞれの内部構造についてはそれ以上の議論はない。言語知識の使用にどのような認知機構がどのような形で関与しているのかを探る必要がある。次節ではこれに関連した問題を取り上げ，発達心理学の分野

---

[9] (2)の目標の裏にあるのは，次のような言語使用の研究に対する見方の変化（あるいは明確化）である。つまり，言語知識の使用の問題を，言語表現が言語的文脈の中でどのように「使用」されるのかという機能的観点からではなく，言語知識がそれと関連する運用システムとどのように相互作用するかという観点から研究する試みが必要だという考えである。Chomsky (2002:106-107)を参照。

で研究が進められている「心の理論」が運用システムの一部を構成している可能性を議論する。

3　心の理論と視点現象

3.1　心の理論

「心の理論(a theory of mind)」とは，私たちが他者の心を理解し，読み取ることを可能にしている認知能力のことである。心の理論の研究は，プレマック(David Premack)らのチンパンジーの欺き行動の観察等に基づく霊長類の心的能力の研究から始まった。[10] その後，ウィマー（Heinz Wimmer)とパーナー（Josef Perner)による人間の幼児期における心の理論の発達についての研究をきっかけとして発達心理学の分野での研究が盛んになり[11]，さらにバロン＝コーエン（Simon Baron-Cohen)らが自閉症の基本的障害を心の理論の欠如と考える新しい見方を提唱し[12]，現在障害児心理学の分野においても心の理論を意識した研究が盛んに行われている。

Wimmer and Perner (1983)は，人間の幼児の心の理論の発達過程を探るために「誤信念(false belief)」課題とよばれる実験を開発した。子安増生がこの実験内容を簡潔にまとめて紹介しており，以下それを引用する。

> パーナーらの「誤まった信念」課題を簡略化して説明すると次のようになる。最初に，人形劇などによって，次のようなお話を子どもに聞かせる。
>
> 「マクシは，お母さんの買い物袋をあける手伝いをしています。マクシは，後で戻ってきて食べられるように，どこにチョコレートを置いたかをちゃんとおぼえています。その後，マクシは遊びに出かけました。マクシのいない間に，お母さんはチョコレートが少し必要になりました。お母さんは<緑>の戸棚からチョコレートを取り出し，ケーキを作るために少し使いました。それから，お母さんはそれを<緑>の戸棚に戻さず，<青>の戸棚にしまいました。お母さんは卵を買うために出ていき，マクシはお腹をすかせて遊び場から戻ってきました。」
>
> マクシという男の子を主人公とするこういうお話を聞かせた後，「マクシは，チョコレートがどこにあると思っているでしょうか？」という質問をする。これに対して，子どもが「<緑>の戸棚」を選ぶと，マクシの「誤った信念」を正しく推測することができたということになる。(子安 2000:96-97)

---

10 「心の理論」が最初に提唱されたのは，Premack and Woodruff (1978)のチンパンジーの他者理解についての研究においてである。

11 Wimmer and Perner (1983)を参照。

12 Baron-Cohen, Leslie and Frith (1985), Baron-Cohen (1995)を参照。

誤信念課題は他者の心的表象の理解能力を探る心理テストである。誤信念課題を幼児に与えて，それを首尾よく解くことができればその子は人の心を推測する能力，すなわち心の理論という認知能力を持っていると判断される。パーナーらは幼児を対象に誤信念課題の実験を行い，年代ごとにその正答率を整理した。その実験結果から，三・四歳ではほとんどの子が正しく答えられず，四〜六歳にかけて正答率が上がることが分かった。その後の追試を含めた一連の観察を踏まえて，パーナーらは心の理論の発達時期はおよそ四歳頃からと結論している。

心の理論の発達が何らかの理由で阻害されるとどうなるのか。バロン＝コーエンは，発達障害の一つである自閉症は，社会情緒的障害というよりはまさにこの心の理論の発達が阻害される認知機能の発達障害なのだと主張している。[13]

バロン＝コーエンを始めとする自閉症が心の理論の発達障害と考える研究者たちは，比較的高いレベルの言語活動を行うことのできる高機能自閉症児であっても誤信念課題をクリアできないことから，心の理論は言語知識とは独立して発達すると推測しているようである。[14] 心の理論が独立の認知モジュールとして機能しているかどうかについては心理学研究者の間で議論があるようだが，言語知識と心の理論が選択的に損なわれうるという自閉症研究における観察は，これらが異なる精神／脳のシステムに属するであることを強く示唆するものである。

3.2　心の理論の発達と視点表現の獲得

他者の目を通して事態を把握する認知能力である心の理論が，言語の使用において重要な役割を果たしている可能性は言語研究者なら誰でも容易に想像できるであろう。どの言語にも他者の視点取得を必要とする「視点表現」が存在するからである。視点表現を適切に使用するためには，話し手が聞き手あるいは第三者の視点に立つことが必要となる場合がある。日本語の授受動詞を例にとると，「やる」と「くれる」の動詞の使い分けは話し手の視点の置き場が「贈り手」か「受け手」かによって決まる。例えば，克行が聡子にワインを送ったことを伝える場合，言語表現としては次の二つが可能である。

(3)　a．克行は聡子にワインをやった。
　　b．克行は聡子にワインをくれた。

---

[13] バロン＝コーエン(1995)は，四つのメカニズムから構成される「心を読むシステム」のモデルを提案している。四つのメカニズムとは，具体的には Intentionality Detector (ID), Eye-direction Detector (EDD), Shared Attention Mechanism (SAM), Theory of Mind Mechanism (ToMM)のことである。そして，自閉症の子どもは，ID, EDD の発達は比較的正常である一方，SAM と ToMM の発達に大きな障害があるということである。

[14] バロン＝コーエン(2002:72-75, 216) 参照。自閉症児の言語使用については熊谷(1998)も参考になる。

ワインの授受という点では同じ情報を伝えるこの二つの表現の違いは，話者の視点が克行と聡子のどちらにあるかという点にある。(3a)の「やる」は話し手の視点が主語の贈り手にあることを要求し，他方(3b)の「くれる」では視点は目的語位置にある受け手に置かれている必要がある。[15] この日本語の二つの授受動詞を適切に使い分けるためには，話し手は自分の視点を状況に応じて贈り手か受け手に転換することが必要となる。このような視点の転換は，言語の使用において一般によく見られる現象であるが，その裏でどのような認知機構がはたらいているのであろうか。正高信男は幼児の視点表現獲得についての研究を通じて，このような視点の転換を可能にしているのがまさに前節で見た心の理論であると主張している。

正高信男は桐野編(1999)において，視点表現の獲得時期と心の理論の発達過程との相関関係について非常に興味深い研究成果を発表している。彼は小学校１年生100人を対象にして，彼らが往来動詞「行く・来る」の使い分けをどの程度まで習得しているかを調査した。「行く」の使用と「来る」の使用，それぞれについて対話によるテストを一人につき20回行い（合計4000試行），全体で正答率が54パーセントという結果であったと報告している。正高は小学一年生の段階でこの基本動詞の使い分けを半数の子どもしか習得していないのは，この動詞の習得に言語以外のなんらかの認知能力の発達が関わっているためであると考える。彼は「行く・来る」の使い分けには他者の視点取得が必要であり，それ故この表現の習得には心の理論の発達が必要条件となると仮定する。[16]

そこで，正高はこの仮説を検証するために，実験に参加した小学生を「行く・来る」の適切な使い分けができるグループ（39名）と使い分けができないグループ（45名）に分け，それぞれに対して心の理論の発達を確かめる誤信念課題のテストを行った。前節で述べたように，誤信念課題に正しく答えられるのは四歳頃からで，小学校１年の段階では間違える子がまだかなりいるようである。[17] テストの結果は，適切な使い分けができるグループでは39人中38名が誤信念課題をクリアし，一方適切な使い分けができないグループでこの課題をクリアできたのは45人中29名にとどまったということである。つまり，「行く・来る」の使い分けができない子の中に，誤信念課題を解けない子が相当数（45人中16人）いたのである。正高はこの実験から，誤信念課題をクリアする能力である心の理論が「行く・来る」の習得の必要条件であると主張して

---

15 克行でも聡子でもない，中立的な視点をとる場合には「やる」が使用される。

16 「行く・来る」はともに人や物の移動を表現する動詞であるが，その使い分けには話し手の視点が大きな役割をは果たしているのはよく知られている。具体的に言うと，人・物の移動を出発点から眺める場合には「行く」が用いられ，移動先に視点を置く場合は「来る」が使用される。また，出発点・到着点のどちらにも視点を近づけず客観的に移動を眺める場合あるが，このような中立的視点をとる場合は「行く」が用いられる。

17 子安(1997:108-109)参照。

18 正高は心の理論は「行く・来る」の習得の必要条件ではあるが十分条件ではなく，この動詞の使い分けには身体運動の発現がもう一つの要因として関与しているという主張を更なる実験に基づいて行っている。極めて興味深い観察であるが，スペースの関係上ここで論じる余裕はない。正高(1997:238-249)を参照のこと。

いる。[18]

4　久野の共感度理論と心の理論

前節の正高の研究は，視点表現の使用には心の理論が関与していることを強く示唆しており，もしそうだとすると心の理論が言語運用システムの一部を構成していると仮定するのは極めて自然なことと思われる。心の理論が運用システムの一部として視点表現の使用に関与していると仮定すると，視点現象に関する研究が認知システムと運用システムとの相互関係を探る上で貴重な経験的研究の一分野となる可能性が高い。幸いなことに，視点現象についてはこれまで特に機能文法研究の分野における久野暲の共感度理論(a theory of empathy)に基づく研究等，広範囲にわたる経験的研究の積み重ねがある。共感度の研究を通じて得られた視点現象についての一般化を，言語知識と心の理論との相互作用という観点からとらえなおすことで，言語使用（認知システムと運用システムの相互作用）の研究が扱うべき経験的問題を見出す糸口がつかめるかもしれない。この節では，視点現象の基本的原理である「視点の一貫性」に注目し，運用システムによる視点現象の解釈のメカニズムについて考えてみたい。

久野は(4)の共感度(empathy)という概念を仮定した上で，(5)の視点一貫性（Ban on Conflicting Empathy Foci）の原理により日本語と英語の様々な視点現象についての説明を試みている。[19]

(4)　共感度

文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感(Empathy)と呼び，その度合い，即ち共感度を E(x) で表す。共感度は，値 0（客観的描写）から値 1（完全な同一視化）迄の連続体である。

(5)　視点の一貫性

単一の文は，共感度関係に論理矛盾を含んでいてはいけない。

(5)は「話し手の視点は常に一定でなくてはならない」というごく自然な考えを共感度(empathy)という概念を用いて述べた言語使用の一般原理である。久野は更に，発話に現れる複数の指示対象への共感度を相対的に決める「物差し」として機能する視点ハイアラキー(empathy hierarchy)という共感度の原理をいくつか仮定している。異なる視点ハイアラキーが視点一貫性の原理のもとでどのように機能するかを「発話当事者の視点ハイアラキー（Speech Act Empathy Hierarchy)」と「表層構造視点ハイアラキー（Surface Structure Empathy Hierarchy)」との相互関係に基づきみてみよう。

---

[19] 久野(1978:134-136）およびKuno（1987:207）を参照。

(6) 発話当事者の視点ハイアラキー
話し手は，常に自分の視点をとらねばならず，自分より他人寄りの視点をとることはできない。

(7) 表層構造視点ハイアラキー
話し手は文中の(他の位置ではなく)主語位置に現れているものに最も容易に視点を合わせることができる。

Kuno (1987:211-212)は，(8)-(10)のパラダイムに対し共感度理論を用いて以下のように説明を試みている。

(8) a. I met John at the party last night.
b. ??John met me at the party last night.
(9) a. I met you at the party last night.
b. ??You met me at the party last night.
(10) a. You met my brother at the party last night. (Right?)
b. My brother met you at the party last night.

(Kuno 1987:212)

(8)-(10)は meet を meet for the first time の意味で用いた場合の判断を示す。[20] (10)のように，出来事に話し手が関わらない場合には主語と目的語は入れ替え可能であるが，(8)や(9)のように話し手と聞き手あるいは話し手と第三者の出会いを記述する場合には，話し手が主語で聞き手・第三者が目的語とならなくては不自然である。(8b)と(9b)の不自然さは，発話当事者の視点ハイアラキーと表層主語視点ハイアラキーが矛盾する共感度関係を指定することに起因するというのが Kuno の説明である。

(8b)と(9b)において，(7)の表層構造視点ハイアラキーは話し手の視点は目的語位置の me よりも主語位置の John や You に置かれることを要求するが，一方(6)の発話当事者の視点ハイアラキーからは John や You ではなく話し手自身 (me) に視点が置かれることが要求される。即ち，(8b)及び(9b)では(5)の視点の一貫性の原則に違反し，二つの視点ハイアラキーが単一文中で矛盾する共感度関係を指定することから，これらの表現が不自然であることが説明される。[21]

---

[20] この「偶然出会う」という解釈では，"John met Mary"と "Mary met John"は意味的に等価であり，どちらの表現をとるか，すなわち John と Mary のどちらを主語とするかは話し手の判断で決まる。

久野は広範囲にわたる視点現象を(6)や(7)をはじめとするいくつかの視点ハイアラキーの相互作用により説明しているが，その際に最も基本となる原理が「視点の一貫性」である。この原理には興味深い特徴がある。それは視点の一貫性が保持される領域を「文(a single sentence)」と定義していることである。視点現象では「話題(topic)」等の単一の文を超えた「談話」の中で決まる概念が重要な役割を果たす。[22] 視点の決定に談話上の概念が関わるとすると，視点の一貫性の適用領域が必ずしも文である必要はなく，むしろ複数の文から構成される「談話」がこの原理の適用領域であっても不思議ではない。もちろん，逆にこの原理の適用領域が「節」などの文のサブパートであるというのも少なくとも理論的にはありうる可能性である。しかし，久野の視点研究により現時点で経験的に明らかになっているのは，視点の一貫性は「文」をその適用領域とするという一般化である。[23]

事態を眺めるときの視点が一貫していなくてはならない，つまり同時に二つ以上のカメラアングルを取れないというのは，おそらく言語とは独立した認知機構（恐らく心の理論）の原理と考えるのが自然であろう。視点の一貫性を運用システムを構成する認知機構の一原理と仮定すると，この原理はインターフェイスにおいて認知システムが出力する表示に対して適用することになる。久野が明らかにした視点の一貫性の適用領域についての一般化が，インターフェイスにおける運用システムによる表示解釈のメカニズムを探る上でどのような意味をもつかを考えてみる。

二節で論じた認知システムと運用システムとの関係を前提に，言語表現の派生と解釈のプロセスを具体的に見てみよう。認知システムは運用システムから自律して統語派生を行い，その出力を「表示」として運用システムとのインターフェイスにはき出す。認知システムは派生のどの段階で，どのような表示をインターフェイスへと送るのか。C-I システムへの出力を例にとると，伝統的な仮定は NS の派生の最終段階で

---

21 久野は談話原則の適用についてのメタ原理として "Markedness Principle for Discourse-Rule Violations" (Kuno 1987:212)を仮定している。このメタ原理の基本的ポイントは，談話原則の違反が文の容認可能性を下げるのは「意図的」違反の場合だけで，「非意図的」違反は文の容認可能性に影響を与えないというものである。この原理のため，(8b)や(9b)のような意図的違反は文の容認可能性を下げる一方，(i)の例では異なる視点ハイアラキーが文中の異なる人物に矛盾した視点付与を行なうにもかかわらず，非意図的違反のため容認可能である。
(i) John harassed me.

22 例えば，Topic Empathy Hierarchy では談話主題(discourse topic)がこの視点ハイアラキーにおける中心概念である。

23 複数の登場人物が出てくる出来事を描写する場合，話し手／書き手が自分の視点を A さんから B さん，B さんから C さんという具合に次々と変えて話をすることはよくあることである。「談話」においては，話し手が常に特定の登場人物に視点を置きつづける必要はないのである。また，視点の一貫性が節ではなく文レベルで成立していなくてはならないことは，(i)の例が示している。
(i) ??John received from Jane the package that she had received from him.
詳しくは Kuno(1987:220-221)を参照。

派生全体の情報を含む「LF 表示」が一括してインターフェイスに出力されるという考えである。[24] この仮定では，C-I システムにおいては表示はいわば「文」単位でインターフェイスに送られ，運用システムの認知機構により解釈を受けることになる。この場合，運用システムの解釈原理の適用に関して理にかなった適用メカニズムとはどのようなものであろうか。認知システムからの出力に関して「LF 表示」の一括出力プロセスを仮定した場合，運用システムの解釈原理の適用についての自然な仮定は(11)であろう。

(11) 統語と運用システムのインターフェイスにおいて，運用システムの解釈原理は統語派生の各出力（文）に対し，その表示全体を領域に適用される。[25]

(11)の仮説を立てると，解釈原理の適用領域について二つの経験的予測が得られる。一つは解釈原理は「表示」の一部でなく表示全体を適用領域とするというものである。これは，束縛理論が運用システムの解釈原理の一部とすると，照応形解釈の局所性等によりこの予測は少なくとも表面上は反証されるため，何らかの見直しが必要となる可能性がある。もう一つは，解釈原理は「文」を超えて適用しないという予測である。つまり，認知システムがはき出す表示がインターフェイスにおいて一定量（例えば「談話」というまとまりになるまで）プールされ，それに対して解釈原理が適用するなどということはないという予測である。この予測は，久野が視点研究を通じて明らかにした一般化から経験的に支持されると思われる。久野の共感度理論では，「話題」のような談話の概念や「話し手・聞き手」のような言語外の要因が重要な役割を果たしているが，にもかかわらず視点の一貫性に代表される視点の諸原則の適用領域は談話ではなく「文」である。視点の一貫性が運用システム（例えば心の理論）の原理とすると，この原理が「文」（つまり表示全体）をその適用領域とするという記述的一般化は，(11)の解釈原理適用についての仮説が正しければその自然な帰結として説明が可能となる。久野のこの適用領域についての一般化は，その経験的予測が正しい限りにおいて(11)を支持する証拠となると考えられる。

もちろん，(11)の妥当性，特に第二の予測については，視点現象だけでなく様々な「談話」の現象に照らして検証が必要である。少し考えただけでも，文領域を超えた

---

[24] Chomsky (2001)では，フェイズ(phase) という派生のあるサイクルごとに表示が切り取られ「意味部門」と「音韻部門」を介してインターフェイスへと送られるという可能性が議論されているが，ここではこの議論には立ち入らない。

[25] 演算子・変項関係や束縛関係は言語機能の外のシステム(C-I システムの関連部門)の問題であるとするミニマリストの仮定が正しいとすると，これらの関係の解釈は運用システムの解釈原理（例えば C-I システムの一部としての束縛理論）が行なうことになる。束縛理論の条件などは LF 表示に対して適用されるというのが経験的議論に基づくこれまでの標準的な仮定であるが，これらの条件が運用システムの一部であると考えた場合，その適用領域についての仮定はこの新たな枠組みでは(11)の仮説からの自然な帰結となると思われる。

文脈に依存する省略現象などは(11)の原理の反例となりうることが予想されるため，(11)がこのままの簡潔な形で成立する可能性は高くはないかもしれない。ただ，認知システムと運用システムとの関係について(11)のような経験的仮説を立て，それを言語使用についてこれまで明らかになってきた一般化に照らして検証していくことで，この二つのシステムのインターフェイスの特性が明らかになっていくはずである。

5 おわりに

久野の共感度研究は，彼が "functional sentence perspectives" と呼ぶ機能的言語研究の一部である。[26] 久野は言語研究は言語現象の統語的要因と機能的要因の両方を考慮すべきと主張し，文法には機能的特性を扱う部門として「談話部門 (discourse component)」が必要であると主張する。この文法モデルでは，言語の統語的特性は統語部門が扱う問題である一方，言語の使用についての一般化，つまり言語の機能的特性は文法内の独立した部門である談話部門で述べられることになる。[27]

言語の使用を認知システムと運用システムとの相互関係ととらえる(2)の観点から，久野が談話部門と呼ぶ文法のサブシステムを再評価するとどうなるであろうか。(2)の基本的考え方は，認知システムは運用システムから自律して — 運用システムの情報には一切アクセスせずに — 派生を進めて最終的にインターフェイスへ表示を出力し，その出力に対して運用システムの各機構が独自のメカニズムで解釈を行う，というものである。[28] この構図を仮定した場合，久野の談話部門は認知システムと運用システムとのインターフェイスの一部門ととらええ直すことができると思われる。談話部門を，理論上，認知システムと運用システムとのインターフェイスにおける解釈機構ととらえることで，これまでの機能文法研究から明らかになった観察を認知システムと運用システムの関係を探る理論研究の貴重な経験的資料として利用できるのではと期待される。

参考文献

Baron-Cohen, S., Leslie, A.M. and U. Frith (1985) "Does the autistic have a 'theory of mind'?" *Cognition* 21, 37-46.

Baron-Cohen, S. (1995) *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind,* MIT Press.

Chomsky, N. (1985) *Generative Grammar: its Basis, Development and Prospects.*

---

[26] 久野は "empathy perspective" を初め "direct discourse perspective" や "flow of information in sentences in discourse" などいくつかの "functional perspective" を提示し，それぞれに見られる一般性を談話部門を原理として述べている。Kuno(1987:29-30)参照。

[27] 久野(1978:302-308)参照。

[28] 久野(1978:306)で主張されている談話部門が派生に影響を与える可能性は，この理論的仮定のもとでは原理的に排除される。

Studies in English Linguistics and Literature, Kyoto University of Foreign Studies.

Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use.* Praeger Publishers.

Chomsky, N. (1988) *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures.* MIT Press.

Chomsky, N. (1991) "Linguistics and Cognitive Science: Problems and Mysteries," in Kasher (1991).

Chomsky, N. (1995a) *The Minimalist Program.* MIT Press.

Chomsky, N. (1995b) "Language is the Perfect Solution!—Interview with Noam Chomsky by Lisa Cheng and Rint Sybesma," *Glot International* 1, 9/10.

Chomsky, N. (1996) "Language and Mind: Current Thoughts on Ancient Problems (part I)." Paper presented at Univ de Brasilia, Nov. 25.

Chomsky, N. (2000a) *New Horizons in the Study of Language and Mind.* Cambridge University Press.

Chomsky, N. (2000b) "Minimalist Inquiries," in Martin *et al.*, eds. *Step by Step: Essays in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik.* MIT Press.

Chomsky, N. (2001) "Beyond Explanatory Adequacy," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20.

Chomsky, N. (2002) "An Interview on Minimalism," in Belletti, A. and L. Rizzi eds., *On Nature and Language.* Cambridge University Press.

福井直樹 (2001) 『自然科学としての言語学—生成文法とは何か』大修館書店

Hauser, M. D., Chomsky, N. and W. T. Fitch (2002) "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?" *Science* 29822, 1569-1579.

Kasher, A. (1991) "Pragmatics and Chomsky's Research Program," in Kasher (1991).

Kasher, A. (1991) *The Chomskyan Turn.* Basil Blackwell.

子安増生 (1997) 『子供が心を理解するとき』金子書房

子安増生 (2000) 『心の理論—心を読む心の科学』岩波書店

熊谷高幸 (1998) 「自閉症：心を読むのが苦手な子どもたち」『子どもが「こころ」に気づくとき』丸野俊一・子安増生編, ミネルヴァ書房

久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店

Kuno, S. (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy.* The University of Chicago Press.

正高信男 (1999) 「認知と言語」『ことばの獲得』桐谷滋編, ミネルヴァ書房

Premack, D. and G. Woodruff (1978) "Does the Chimpanzee Have a Theory of Mind?" *The Behavioral and Brain Science,* 1. 515-526.

澤口俊之（1996）『脳と心の進化論』日本評論社
澤口俊之（2000）「脳内の言語処理過程」『Computer Today』96, 4-13, サイエンス社
Stemmer, B. "An On-Line Interview with Noam Chomsky: On the Nature of Pragmatics and Related Issues," *Brain and Language* 68, 393-401.
Wimmer, H. and J. Perner (1983) "Beliefs about Beliefs: Representation and Constraining Function of Wrong Beliefs in Young Children's Understanding of Deception," *Cognition* 13.1, 103-128.